

「新紙幣発行における新技術と キャッシュレス化の流れ」



全日本電設資材卸業協同組合連合会
会長 小島 寿之

2024年7月3日、日本は20年ぶりに新しいデザインの紙幣を発行し、1万円札の肖像画も40年ぶりに刷新しました。新たな1万円札には日本の資本主義の父と称される渋沢栄一、5千円札には津田塾大学の設立者である津田梅子、千円札には細菌学者の北里柴三郎の肖像が採用されました。

この新紙幣には、偽造防止のために世界初の「3Dホログラム」技術が採用されており、このホログラムは、おもて面の左側にあるストライプ部分に印刷され、肖像画の向きや模様が見る角度によって変化します。これにより、紙幣の偽造がより困難になります。さらに、新紙幣には「深凹版印刷」という技術が用いられており、インクを高く盛り上げることで視覚障害者が触覚で識別しやすくなっています。そして、11本の斜線が各紙幣ごとに異なる場所に配置され、また、金額表示

も漢字よりも洋数字を大きく表示することで、外国人観光客にも分かりやすくしています。このように、新紙幣は、ユニバーサルデザインにも配慮し、日本の精密で高度な技術を示す役割も果たしております。

紙幣の流通量は、2004年末の約78兆円から2024年5月末には約120兆円と大幅に増加してきました。これは、低金利や相続税の課税強化などが原因で「タンス預金」が増えたためです。

日本における現金志向は高く、2018年の世界各国でのキャッシュレス決済比率は、日本が24%であるのに対し、アメリカは47%、イギリスは57%、韓国は95%でした。政府は2025年までにキャッシュレス決済の比率を欧米並みの40%に引き上げる目標を掲げています。

ここ数年、新型コロナウイルス禍の影響もあり、日本でのキャッシュレス化の進

展は著しく、特にシニア層にも及んでいます。2023年の調査によると、60代で5000円超〜1万円以下の支払いに現金を使う人の割合は34%に減少し、5年前の75%から半減しました。これにより、世代間の「キャッシュレス格差」が急速に縮小し、2023年のキャッシュレス決済比率は39.3%となり、2024年には1年前倒しで目標の40%を達成するのではないのでしょうか。

新しい紙幣の発行は、偽造防止技術の進化とキャッシュレス化の進展という二つの側面を象徴しています。世界初の技術が導入された新紙幣は、現金を安全な決済手段として維持すると同時に、現金利用の減少という新たな時代の流れを反映しています。キャッシュレス化が進む中で、紙幣の役割はどのように変わっていくのか、今後の動向が注目されます。